

正倉院の衣服について

松 島 順 正

正倉院に伝わる奈良朝の服飾品はその数五百点を越えしかも多種類に亘っている。およそ脆弱にして襤褸となり易い絹布の繊維品が、かくも数多く千二百余年を経た今日においてもほぼその形態を備えて伝存しているのは他に類例がなく、わが上代服飾研究上無二の資料と言わなければならない。

さて正倉院には天平勝宝四年四月九日の東大寺大仏開眼会に当り召された聖武太上天皇の礼服

帛袷袍一領 襖子二領一緊袖一袷

汗衫一領 褶一腰羅襪

袴一腰

光明皇太后の礼服

帛綾袷袍一領 単衣一領

絮綿褶一腰羅襪

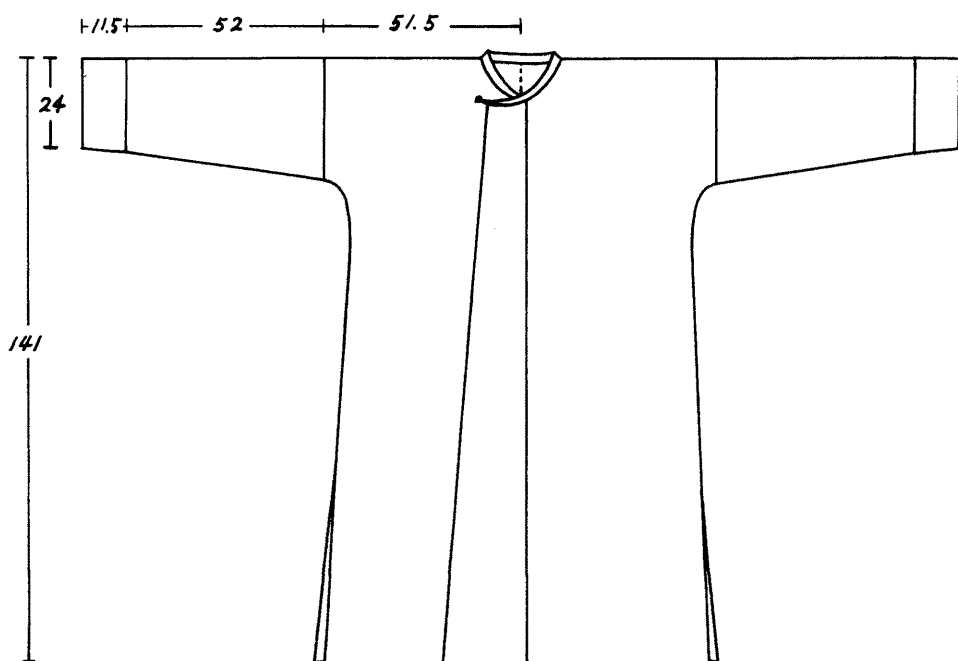
がその礼冠と共に納められていたことが、延暦十二年曝涼使解、弘仁二年勘物使解および斉衡三年雜財物実録の一部と見られる礼冠礼服目録断簡等に記されているが、現在は礼冠残闕だけが残っているに過ぎない。

しかしながら現存する院藏の衣服類はその数多く、これを大別すると、大仏開眼会日に催された諸楽舞の衣裳を中心とする楽装束と、東大寺造営にあたった造東大寺司に属する下級職員や工人等、また当時盛んに行われた写経事業に奉仕した写経生および写経所の雑役に従事した労務者の衣服すなわち浄衣とである。前者はその多くは錦綾羅、藤夾纈の絹縹を料布とした文字どおり絢爛華麗な楽装束であり、後者は麻布の簡素な作業衣ともいうべき浄衣である。両者ともはじめ造東大寺司の管理するところであったが、同司廃絶後は東大寺に帰し、遂に正倉院に遺存されたのである。以下これらの衣服について略述することとする。

因に院に藏する若干の袈裟法衣についてはここでは触れない。

一 楽装束

正倉院の楽装束の殆んどは前に述べたように東大寺大仏開眼会当日行なわれた楽舞の衣裳である。幸いにもこれらの衣服類にはそれぞれにその衣服の名称や、これを着用して演舞奏樂した楽曲名などが克明に記されていて、諸種の衣服の形態が知られるばかりでなく、当時行なわれて



第一図 大 歌 袍 ($1/20$)

いた諸楽舞の構成なども窺い知ることができる。いま楽服類の銘記から楽名を掲げると

大歌 唐古楽 唐中楽 唐散楽 狛楽

度羅楽 呉楽 雑楽 林邑楽

等である。現存する衣服はこれら各楽舞の衣裳の全部ではないが、当時の楽服の種類やその形態を窺うに足るものである。そしてこれら衣服の種類を見るに

袍 襖子 半臂 背子 汗衫 布衫 袴

接腰 前垂 腰袈 脛裳 襪 帶

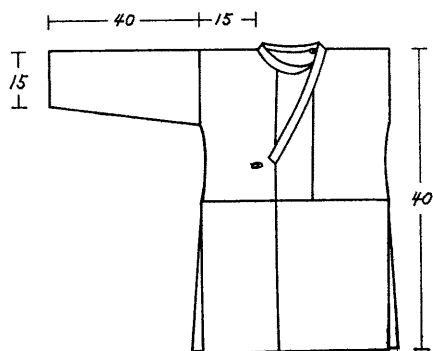
がある。以下順次これ等の衣裳につきその形姿を図示し略解を加えることとする。

1 袍

上衣である。上領^{あぐみ}、端袖を付し両脇裾を開く。

第一図は大歌袍で表は双竜円文縁綾、裏は白紵の拾仕立である。右衽裏に「東大寺大歌袍天平勝宝四年四月九日」左袖口裏に「田上王」の墨書がある。

(図版①参照) 他の楽服に白紵拾袍、単袍などがあるが、その形



第二図 師子児衣 ($1/20$)

態は大歌袍に類する。なお特異な袍として、呉楽白絶袷袍は端袖の先にさらに錦の端袖を付け、袖の長さ九〇センチを超える長袖である。

第二図は呉楽師子兒衣と称しているがおそらく師子兒袍と思われる。

身頃は白絶、赤地錦袖、同錦裾、黄地錦衽、裏はすべて紅絶という華麗な上衣である。右衽裏に「東大寺前二師子兒 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。

2 襖子

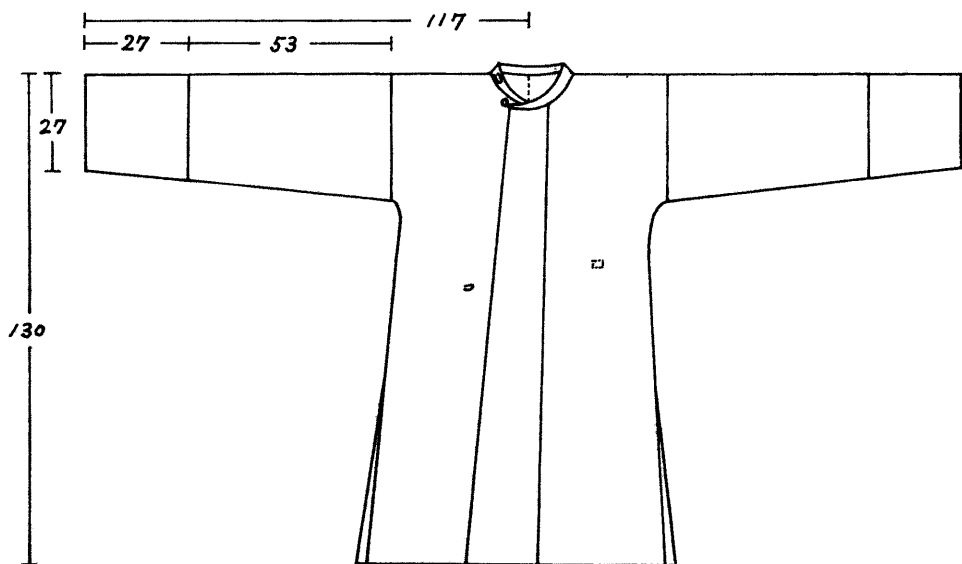
袍の下に襲ねる綿入または袷の衣で、続日本後紀天長十年五月辛丑条に、「北山玄雲黯靄、山嶺不見、終日天寒、衆人多着襖子、」とあるように、寒冷に際し着用するものである。然るに院藏の襖子はすべて絶単衣である。大仏開眼会は夏四月すなわち初夏の候に入り、時期的に単衣としたのであろう。

第三図は唐中楽三台襖子、白絶単、形は袍と全く同じである。右衽裏に「唐中楽三臺襖子 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。襖子中には右だけが垂領に仕立てたものが多い。(図版②参照)

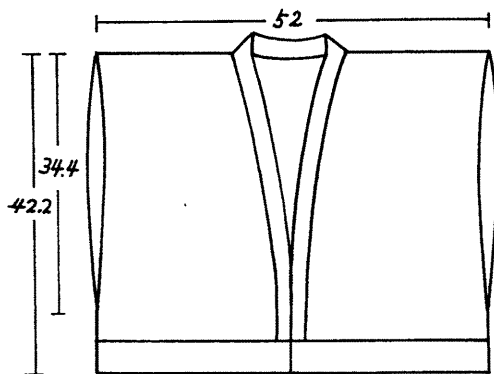
3 半臂

普通袍の下に着用するものといわれるが、袍を着けず半臂を上衣とすることもあったようである。半臂には極く短い袖がついているものと袖なしのものがある。襟は垂領で欄があり腰紐が付く。

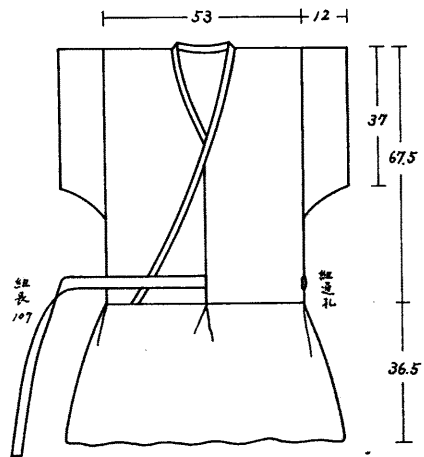
第四図は大歌半臂、単仕立て身頃、袖、衽および襟は生絶、欄は茶地蒔縹絶、紐は欄と同じ蒔縹絶を用いている。右襟裏に「東大寺大歌半



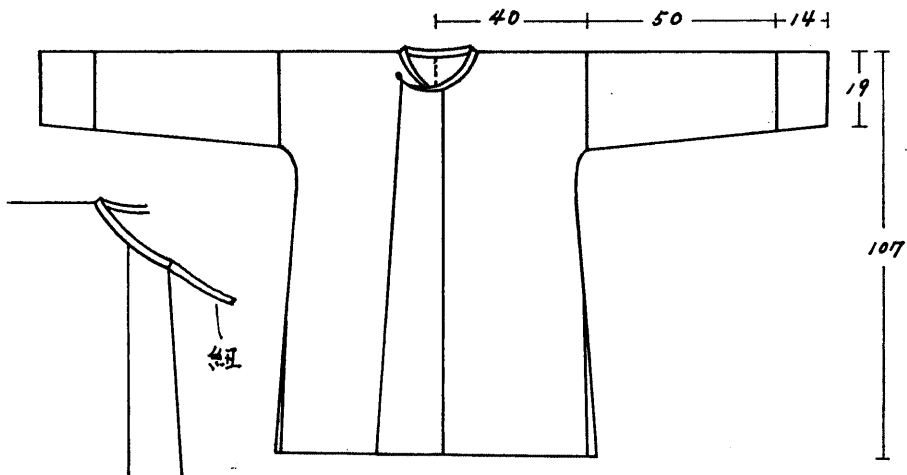
第三図 三 台 襖 子 (1/20)



第五図 呉女背子 (1/10)



第四図 大歌半臂 (1/20)



第六図 醉胡汗衫 (1/20)

臂 天平勝宝四年四月九日」、また紐に「公文真総」の墨書がある。

4 背子

女子の用いる丈の短い袖のない上衣である。

第五図は呉楽呉女背子で、身頃と襟は赤地唐花文錦、裏は黄縄の拾仕立、裾には紫地錦の短い欄が付いていて、女子の上衣にふさわしい華麗なものである。右前身の裏に「東大寺 前呉女六年」の墨書がある。

5 汗衫

単の肌着で形は袍に似て端袖を付けるが、左が上領、右が垂領のものが多く、汗衫と記すものは皆縄を用いている。当時縄の衫を汗衫とい、布の衫を布衫と称した。

第六図は呉楽醉胡の汗衫で白縄、右が垂領になっている。左衽裏に「東大寺後一醉胡 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。(図版③参照)

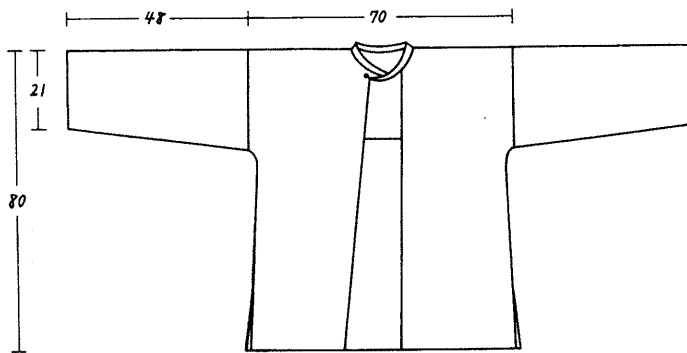
6 布衫

布の汗衫をいう。院蔵布衫には数種の形態がある。

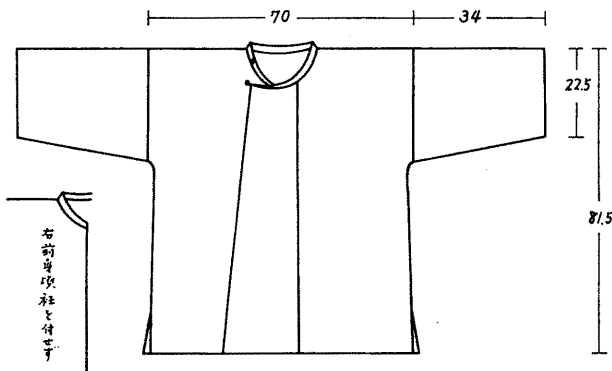
第七図は呉楽庇持布衫、身頃と衽は単の布で

あるが、袖は紫綾表、白纒裏の衿仕立、襟と左衽の上部にも紫綾を用いる。右衽裏に「後二庇持衫 天平勝宝四年四月九日 東大寺」の墨書がある。

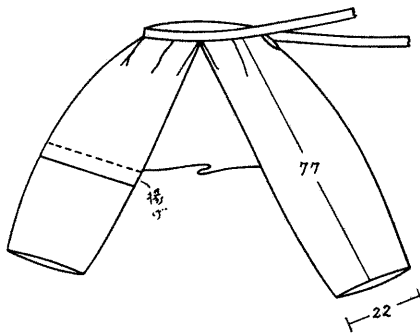
第八図は狛楽白盤布衫、単の布、下前の衽は着けていない。下前襟下に「東寺駒楽白盤布衫 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。(図版④参照)



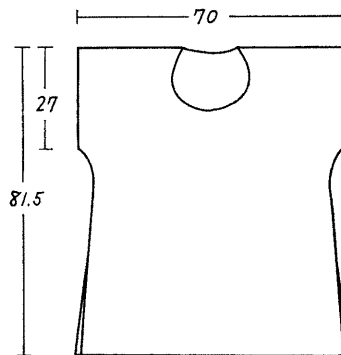
第七図 庇持布衫 (1/20)



第八図 白盤布衫 (1/20)



第九図 久太布衫 (1/20)



第一〇図 久太袴 (1/20)

第九図は度羅樂久太布衫、この種の布衫は貫頭布衫ともいわれ、一幅の布を二つ折りにし首のところをまるく切り抜き、両脇を縫い合わせた簡単な仕立である。右脇表に「東寺度羅樂久太衫 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。

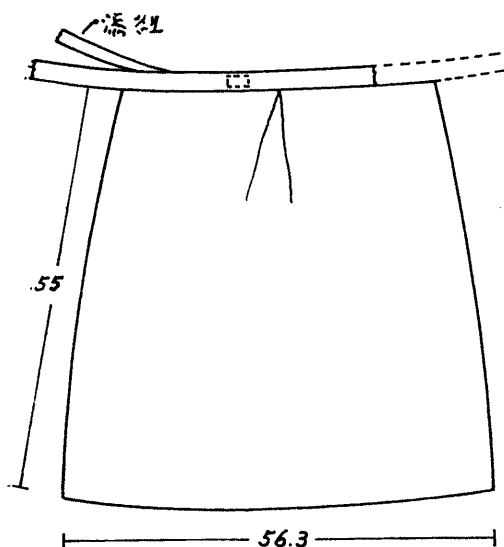
7 袴

袴には開股式と閉股式の両様があり、臈夾纒絶、緋・緑・紫絶を用布とするものがある。

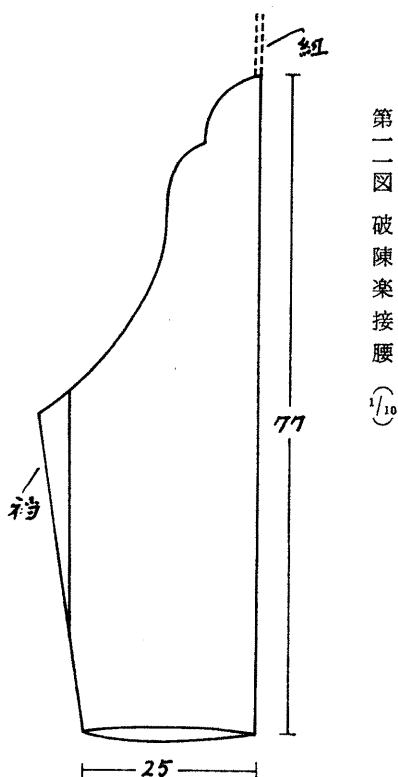
第十図は度羅樂久太袴、白纒衿仕立で袴間に方形の襠を入れたいわゆる閉袴式である。股下に「揚げ」を施したものであるが左脚のは解けている。紐裏に「東寺度羅樂久太袴 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。

8 接腰

旅行や乗馬の際袴の上に着けたという。楽装束とし



第一二図 呉 公 前 垂 (1/10)



第一四図 破陳案接腰 (1/10)

ては唐楽、狛楽の舞人が着用したもので接鞆あるいは授腰とも書く。

第十一図は唐古案破陳案接腰、表は緑地葡萄唐草文錦、裏は緋絁の袷仕立てである。筒状で上腿に接するところは刳り形に作る。上端に緋絁紐を着けた痕跡が残る。裏に「東寺唐古案破陳羅接腰(つゝ) 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。

9 前垂

第十二図は呉案呉公前垂で同形のもの二条あり、いずれも花文夾纈羅に緋絁の裏を付け緋絁の腰紐を着けるが、さらに一条は紐の表に、他の一条には紐裏にそれぞれ緋絁の添紐がつけられている。紐の着け方より見て二条一对をなすもので前後につけたものと考えられる。紐裏に「前一呉公前垂 東大寺 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。

10 腰袈

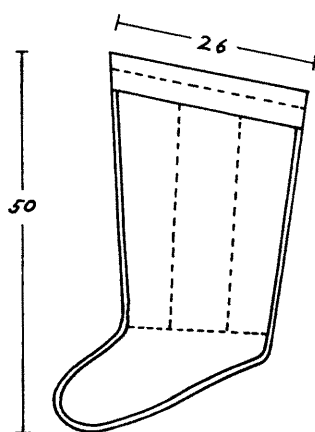
腰垂または腰比礼ともいう。呉案の力士、崑崙、師子児等が用いたことが記録に見える。

第十三図は銘識がないが腰袈と考えられるもので、淡緑絁紐より四条の脚を垂れる。各条は表から錦、紅纈纈、縹纈纈、黄絁の四枚を重ね、表の錦には量綱錦で縁どる。

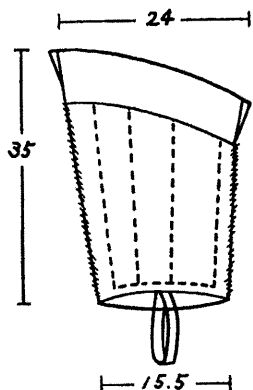
11 脛裳

今の脚絆にあたるものである。

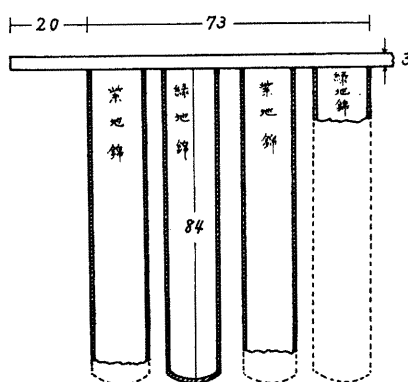
第十四図は度羅案婆理脛裳、表錦裏絁の袷仕立てで表の上下に白絁の紐を付ける。裏の一端に「東大寺度羅案婆理脛裳 天平勝宝四年四月九



第一七図 機深形(1/10)

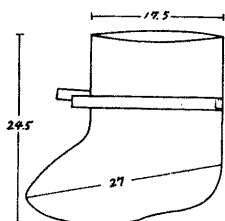


第一五図 呉楽脛裳(1/10)

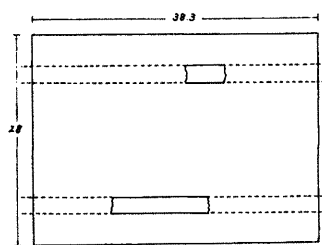


第一三図 腰 排(1/20)

日」の墨書がある。
第十五図は呉楽の装束
のいで品名を識していな
いが前記接腰の下半部を
残したような形をなし、
一種の脛裳と考えられ
る。龜布の芯に上下に布



第一六図 笛吹機(1/10)

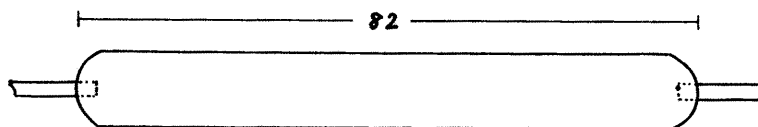


第一四図 婆理脛裳(1/10)

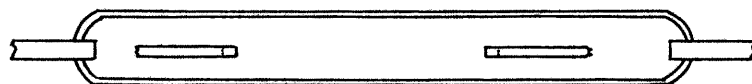
浅形、深形の二種がある。
第十六図は呉楽笛吹機で
浅形、表は紫地花文錦、裏
は生絁、かかとの上部に緋
繩の紐を付ける。裏に「後
二笛吹 天平勝宝四年四月
九日 東大寺」の墨書があ
る。
第十七図は深形の機、芯
と表は布、裏は白絁を用い
る。前後と底の合わせ目は
白絁の覆輪を施し、上縁は
錦で飾る。墨書は表に「六
人部石嶋」とあるのみで楽
名を記さないが、おそらく
この種の機は楽用のもので

を重ねさらにその上を白絁でつつみ、上縁には紫地錦を飾り四条の刺
縫を施してある。同形のもの二枚を合わせ前後を綴付けて筒状としてい
る。裾口には白絁の足柄をつけた痕跡を止めている。表の絁に「東寺呉
楽前二 天平勝宝四年四月九日」の墨書がある。
12 襪

(表)



(裏)



第一八図 駒 形 帶(1/10)

13
帶

幅の広い腹帯で勒肚巾ともいう。

第十八図は狛楽駒形の帯。蘭筵の芯を布で裏み、表は葡萄唐草、裏は緋纒を用いる。裏側両端に緋纒の紐を付け、さらにそれより二十数センチ内側に同じ裂の紐がついている。

以上院藏の主たる樂装束を掲げその形態の概要を述べたが、そのうち袍、襖子、汗衫、袴、襪等で樂服として特殊な構成になるものを除き、当時の一般の朝服や制服と甚しい差異はなかったと考えられる。殊にこれら樂服の用布量を正倉院文書中に示されている経師等に支給した繩の衣服類の用布量と比較対照するとき、ますますその感を深くするものである。現存する院藏樂装束にして銘識の存するものを示すと左表のとおりである。

大歌

4	袍
1	半臂
1	汗衫
1	袴
3隻	襪

唐古樂

安破武 君陳 子樂王		曲名・其他 種別	
		袍	襖子
1	1	半臂	汗衫
1	2	布衫	袴
	2 隻	接腰	脛裝
2 隻	1 隻	襪	帶
1		裏	備
			考

羅
陵
蘇方皮王
蘇芳兒
橫笛
三鼓打
1
1
1 1 2 1
1
1 隻

唐中樂

曲名・其他				種別
鼓	横	琵琶	沁河	三
擊	笛	琵琶	鳥	坏
1				袍
1				襖子
1				半臂
1				汗衫
1 1 1 1 1				布衫
				袴
				接腰
				脛裳
				襪
				帶
				裏
				備
				考

唐散樂

曲名・其他	種別	四鼓	橫拍	持	皇帝破陳	嗔	渾	女
		打	擊	笛	子	笠	面	脱
	袍						1	
	襖子					1	1	
	半臂				2		1	1
	汗衫						1	
	布衫	1	2	1	1			
	袴							
	接腰					1 隻		3 隻
	經裳							
	襪			1				3 隻
	帶	1						
	裏	1						
帶は革帶	備							
	考							

久 婆		曲名・其他 種別
太 理		
2	袍	袍
	襖子	襖子
	半臂	半臂
1 1	汗衫	汗衫
4	布衫	布衫
1 1	袴	袴
	接腰	接腰
1	脛裳	脛裳
1 襪	襪	襪
	帶	帶
	裹	裹
	備	備
	考	考

鈴 銅小鼓拍拌大曾師駒駒白弄樂		曲名・其他 種別
鈴 鼓 宿 万 形		
從 拔 擊 擊 子 取 德 里 子 從 形 盤 禿 頭		
1 1		袍
	1	襖子
	1	半臂
	1	汗衫
2 1	1 1 1 1 1	布衫
1 2		袴
	1	接腰
		脛裳
		襪
1		帶
1	1 1	裹
		備
		考

3	袍
1	汗衫
6	布衫

曲名・其他種別

鉦盤	鼓	笛	底	醉	太孤	太孤	婆羅	力士梓	力女	吳從	吳女	崑崙	迦樓	金剛梓	金剛取	吳公	治道	師子	師子
擊	擊	吹	持	胡兒	父門			取	士	從	女	崙	羅		取			兒	子
	2			1	1	1					1	1		1	1			1	
											1								
				1					1										
2	3	1	1	1	2		1				1	1	1	2		2	2	4	
	2											1		1	1				
																1			
								1 隻						1 隻					
2 隻								1 両											
																2			
1									1			1							
3隻	1隻	6隻	1両	1両	2隻	3隻	3隻	1隻	2隻	2隻		2隻	1隻		2隻	1隻	2隻	2隻	
2	2	6	1	1				1					1		1				
1		1	1		1				2			1	1				1	1	1
革帶1は						酔裏胡王					領他巾に1								

(9)

記載なきものである。

二 浄衣

正倉院文書によると当時の下級職員や工人らに官より支給する衣服を浄衣と呼んでいる。院蔵の布浄衣には、衣の背に「絹衣」と褐色に印捺せるもの、「東大寺」と墨記するもの、また胸に「銅工」と記するものなどがあり、今の印半纏を思わしめる。そしてこれ等の浄衣は東大寺司に属した工人らに貸与されたいわゆる官給品であって、着古びて破れや汚れが甚しく使用に堪えなくなり返納したものと考えられる。果してその現状を見るに、衣袴の袖先や裾が欠損するもの、また傷んだところに継ぎ当てを施して所々修理を加えたもの、あるいは応急の処置であろうう綻びや破れを無造作にかい摘んであるものなどが多い。これは伝世の久しきによる朽損というよりは、むしろ返納当初の実態をよく伝えているものと言えよう。一例を掲げると「久米浄衣返上」と墨記する布袍の如きは、袖や下半身にわたり褐色の汚染が甚しく、まさしく返納の理由を物語っている。久米は正倉院文書に見える久米家足と推定され、装潢として天平勝宝頃写経所で働いていた人で、褐色の汚染は経紙を染めた染汁によるものであろう。これらの浄衣はたとえこのような状態であつても、比較的良好な形態を保っていて、官給品とはいえ、当時の庶民の服装研究上絶好の資料ではなからうか。文書には布と共に緇の浄衣支給のことも見えるが、緇の遺品は今のところ見受けられない。おそらく布

に比して数倍脆弱な緇は残片粉塵となり易く、且つ楽服と異なり、日常の使用により襤褸となり返納に至らなかつたものかも知れない。

さて当時浄衣とは衣と袴とをいう場合もあるが、写経所においては経師以下に支給する袍、襖子、汗衫、袴、褌、裳、冠、襪の他、被、湯帳前裳、早袖をも一括して浄衣と称している。正倉院にはこれらの浄衣の中で、布の袍、袴、襪、前裳、早袖の数種を残すに過ぎない。次にこれらの遺品について記するが、まず現存衣服との対比の便に供するため写経所文書より浄衣の品目とその用布量を抄出すると左表のとおりとなる。

a 緇を料布とせるもの

品目	用布量	メートル換算 (cm)	品目	用布量	メートル換算 (cm)
綿袍又拾袍	六丈	一七七六・〇	単袍	三丈	八八八・〇
襖子	四丈五尺 二丈二尺	一三三二・〇 六五二・〇	単袴	一丈二尺五寸	三七〇・〇
汗衫	(二丈二尺)	(五九二・〇)			
綿袴又拾袴	二丈五尺	七四〇・〇			

b 布を料布とせるもの

品目	用布量	メートル換算 (cm)	品目	用布量	メートル換算 (cm)
綿袍又拾袍	三丈六尺	一〇六五・五	単袍	一丈八尺	五三二・八
女袍(拾)	二丈六尺	七六九・六	女袍(単)	一丈三尺	三八四・八
袴(拾)	一丈四尺	四一四・四	單袴	(二丈二尺)	(三五五・八)
冠			襪(單)	七尺(六尺)	(二〇七・二)
前裳			襪(單)	三尺	(七十七・六)
早袖	九尺 (一丈)	(二六六・四) (二九六・〇)			

(註) 調庸純布の丈量は勝宝頃には、調純は長六丈八尺一寸九寸が一匹、調布は長四丈二尺八寸二尺四寸が一端、庸布は長二丈八尺八寸二尺四寸が一段である。院藏純布の調庸銘も明らかにこれを証している。勿論この寸尺は唐大尺に拠るといわれる天平尺で現わしたものである。正倉院宝物尺中実用尺と見られるものを基準として算出すれば、当時の一尺は曲尺の約九寸八分すなわち二九・六センチに当る。表中の換算はこれにより算出したものである。

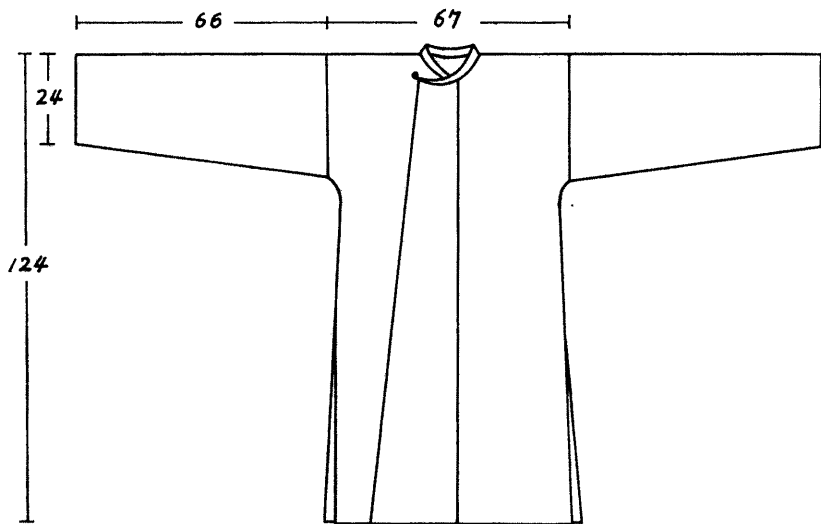
1 細布袍

細布とは普通の調庸布の一センチ平方に経糸十本内外、緯糸七乃至九本に対し、経糸は二十本に近く緯糸十五本前後の密度で織り成された布をいう。院藏の上総国調細布と墨記ある布もこれに類し、当時細布と称せられたものの織密度が知られる。

第十九図は夾纈細布単袍で、前記楽服の袍とその形態は変わらないが端袖を付けていない。右袖口内に「路廣成」と記すのは着用者の名であろう。この種細布袍は、浅紅色、黄色あるいは紅または藍の絞り染に染め上げたものがあり、袖口や衿に人名を記すものが多い。下級官人に支給した衣服と思われる。この布袍の用布量はおよそ五〇〇センチ、布単袍の一丈八尺の用布量に近い。

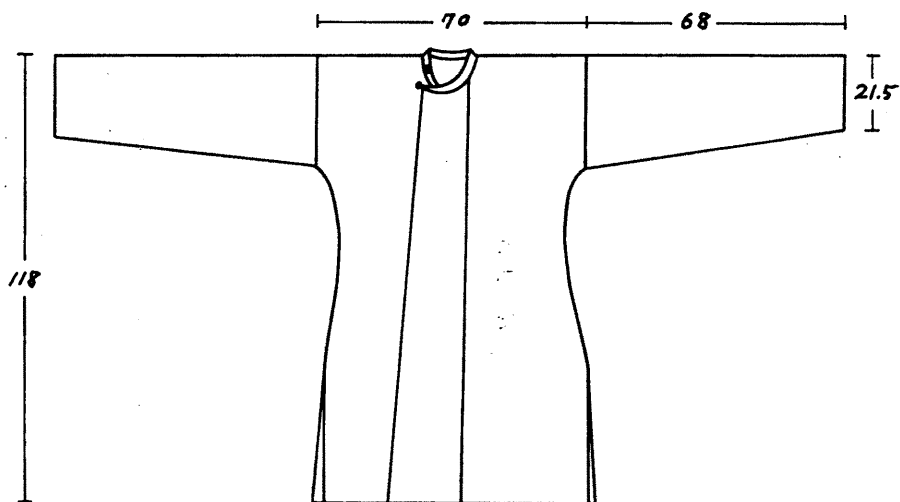
2 布袍

普通の布を用いた袍で、その多くは工人や雑役に従事した人に支給されたものであろう。背に淨衣、胸に銅工など記すものはこの種の袍である。中には二三左衽のものがあり、次に掲げる女袍と共に、養老三左衽禁止の令あるに拘らずなお旧習を捨て難い人もあったことが知られる。



第一九図 細布袍 (1/20)

第二十図は前に述べた久米淨衣である。布単袍、形態は細布袍と同様で、用布量もまた大差がない。左衽裾裏に「久米淨衣返上」の墨書がある。



第二〇図 布 袍 (1/20)

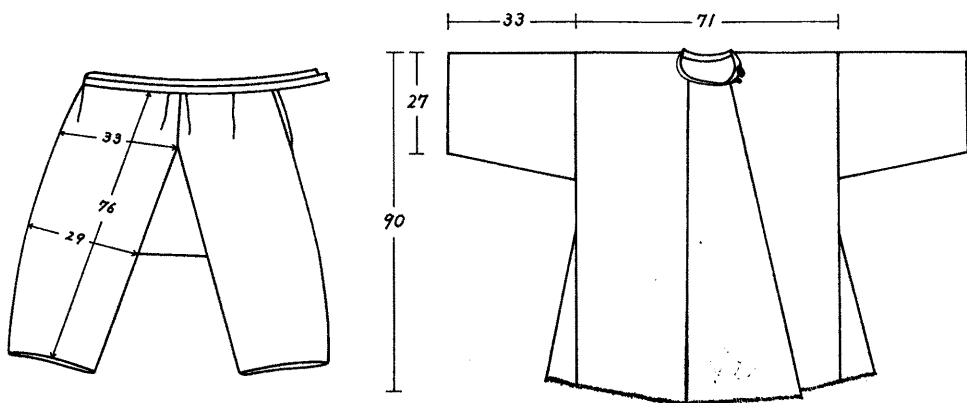
3 布女袍

男子の布袍に比べて丈衿ともに短く、袖幅は広く裾脇に襷を入れた特異な形をしている。この種の袍ははじめ布衫とされていたが、楽服中の布衫にもこのような形態のものはなく、その用布量より推定して女袍とするを適当と考えられる。布女袍は優婆夷、雇女らに支給されるもので、その用布量は布袍に比し短かい。

(図版⑤参照)

第二十一図は単の布女袍で上領左衽に仕立てられている。長さ約三四〇センチの布を用いる。単女袍の用布量一丈二尺に比すべきものであらう。

4 布袴



第二一図 布女袍 (1/20)

第二二図 布袴 (1/20)

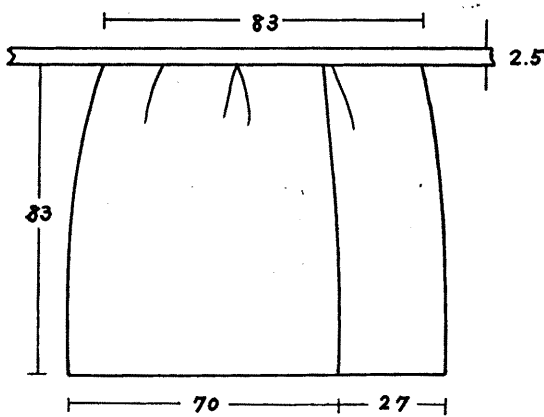
楽服と同様袴にもいわゆる開袴式のものと同様開袴式のものがある。

第二十二図は閉袴式布単袴で、一幅の布を脇で折り袴下で縫合わせ、袴間に襷を入れ紐は脇で結ぶようになっている。用布量約一六〇センチ、脚表上部に「王」、裏の同じ位置に別筆で「廣万呂」と墨書してある。

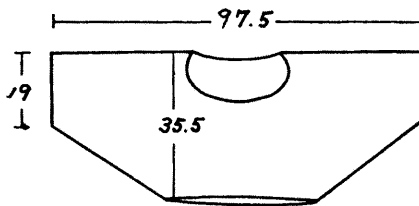
(図版⑥参照)

5 前裳と早袖

ともに衣袴の傷みや汚れを防ぐために着ける前掛と肩覆である。雑役に従事する男女に支給されるもので、冠を含めて一丈または九尺の布を用布量としている。



第二三図 前裳 (1/20)



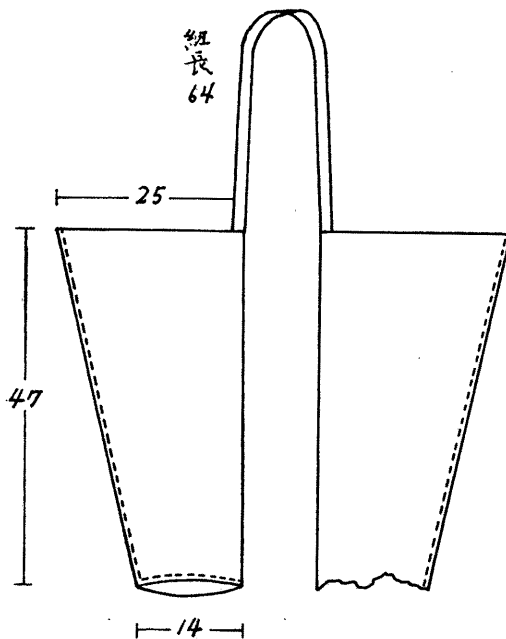
第二四図 早袖 (1/20)

第二十三図は前裳、一幅半の布を用い襷を四ヶ所にとり、紐付幅は八センチとしてある。

第二十四図は早袖、一幅の布を折り中央に頭を通す孔を穿ち両脇を縫った簡単な仕立てである。用布量は、前掲前裳とを合わせ約二三〇センチ。(図版⑦、⑧参照)

6 腕貫

写経生が腕にはめ上衣の袖の汚れを防ぐためのもの、今の腕カバーに当る。紐にはそれぞれ使用者(写経生)の名が記されている。腕貫の名は文書に見えず、当時どんな名で呼ばれていたか不明である。従って用布量も示されていない。おそらく被服の余り裂を利用して仕立てられた



第二五図 腕貫 (1/10)

ものであろう。袖口に墨の汚れや、文字が逆に写っているものがある。

第二十五図は経師契斤乙万呂が使用した腕貫、肩にかかる紐にその名が記されている。白絶単、一幅の絶を折って筒袖状となし、上端に紐をつけて左右をつなぐ。

後記 本稿掲載の実測図は主として共立女子大学教授山本らく氏著

「日本上代被服構成技法の観察」に拠り作成したものである。